

昭和三十三年における国語学界の展望

国語史 (上代・中古)

岸田武夫

三十二年における国語史研究の面においては、国語の系統・起源に関するいくつかのすぐれた研究が発表され、それに伴なう論争も行なわれて、その方面にきわだつた特徴を見せたのであるが、三十三年は、一応休止状態にあつて、わずかに大野晋氏が「日本語の古さ」(講座現代国語学、Ⅱ、七月)において、『日本語の古さを計る方法』についての一つの方法的示唆を与えている程度である。

その他の方面においては、依然として、文法・語意に関する論考が多い。中には、思いつき程度のものも見られるが、精密な着実な研究も見出すことができる。従来比較的多く研究の手が加えられているこの分野においても、なお研究課題は無限であることを思わせる。国語史の方法を説くこともよし、新しい分野を開拓することもまたよしであるが、従来の研究のあとを追つて、個々の現象をただひたむきにどこまでもつきつめてゆこうとする研究態度もまた尊い。

訓点語・訓点資料に関する研究もまた活潑であつた。近來のこの方面の研究は、訓点語学会の成立によつて、一層の進展を見せ

て、国語史研究の上に寄与するところが大きい。古点本の「釈文」一つにしても、大きな労力を伴なうものであることを思う時、その成果に対して敬意を表さなければならぬ。

ただ、このような部分的な研究の盛況にもかかわらず、まがりなりにも「国語史」の記述のなされるのはいつのことか、ということに思いをいたす時、前途はなお遠慮であることを感ぜずにはいられない。けれども、それなればこそ、この道をたどる者の生きがいもあるものであり、一つ一つ積み重ねられてゆく「成果」にふれる喜びもあるのである。

以下に述べるところは、このような「成果」についての各項目別によるあらましの紹介である。

音韻・文字・表記 音韻に関するものとしては、まず、歴史的变化遷について記述したものに、馬淵和夫氏「国語の音韻の変遷」(国語教育のための国語講座、2、十月)・浜田敦氏「濁音・撥音・促音表記の沿革」(続日本文法講座、2、六月)がある。馬淵氏は、古事記におけるシ・オ・ホに甲・乙二類の音の区別の

あったこと、上代のサ行頭音がすべて〔J〕であったことなどに、氏自身の研究にもとづく新しい見解を示しており、総じて、悉曇資料をふまえているところに論述の強味を見せている。ただ、音便について、これをすべて音の脱落現象と考えて、そこに共通の性格を見ようとするということ、撥音便をム音便とン音便に分けて考えようということについては、異論もあろう。浜田氏のは、撥音・促音・拗音の成立と濁音・長音の音韻的性格について述べてある。

ここで特に注意をひかれるのは、促音・撥音についてのいわゆるゼロ表記に関する記述である。浜田氏は、さきに字音語・訓点語におけるゼロ表記の原則が固有の日本語の語彙にも適用できるのではないかという「疑い」を提出されたのであるが、この「疑い」は「肯定」の形をとって広く蔓延した。ところが、浜田氏は、ここで、ゼロ表記なるものは氏の立場における「音韻」としては認められないものとしておられるのである。

上代の音韻について論じたものに、北条忠雄氏「上代国語における母韻調和の吟味」（文芸研究、三十号、十月）があるが、これは、氏の旧稿「上代特殊仮名遣におけるオ列の諸問題」（音声の研究、七輯）の論旨を再説詳論したものの。アルタイ式母韻調和説に対して、その前提となるオ列音の甲・乙の部類分けそのものに問題があるものとする。そうして、主として母韻転換の現象を手がかりとして、オ列乙類を〔O〕、オ列甲類を〔U〕（Uに近いO）と見るのである。岸田武夫「国語における音節の脱落について―連音中部・末部における音節の脱落―」（京都学芸大学学報、十二号、三月）は、文献を資料として、音節脱落の一般通則を見よう

としたもの。

音韻資料に関する面においては、着実な成果があげられている。馬淵和夫氏「連声と音便」（国文学漢文学論叢／東京教育大学V三月）・森岡健二氏「五韻次第考」（東京女子大学論集、十二月）・三沢淳次郎氏「五音五位之次第」の考察」（甲南女子短期大学論叢、三月）等である。馬淵氏のは、氏の悉曇研究の一端を示したものである。平安時代から中・近世に及ぶ資料を博搜して、主として連声説における「四種連声」と「東寺二種連声」の成立由来について説き、あわせて、悉曇資料における「音便」の意味と変遷について述べた力作である。森岡氏・三沢氏のは、両書の文献的性格について精細な考証を施したものである。他に、アクセントに関するものとして、桜井茂治氏「複合名詞のアクセント法則―五音節語を資料として―」（国語学、三十三輯、六月）があるが、これは平安時代から院政時代にかけてのころにおける五音節複合名詞のアクセントについて、基本アクセントの型・先部要素並びに後部要素と複合語のアクセント形態との関係を明らかにしようとしたもの。数すくない複合名詞アクセントの史的考察の一つとして貴重なものである。木之下正雄氏「形容詞イ音便化の条件」（国語国文、二十七卷十一号、十一月）は、形容詞イ音便化の基本的条件が体言（特に形式名詞）・終助詞カナに接続することにあるとし、結局、音便化は結合の強い「話節」の中において生ずるものとする。すぐれた着眼である。

文字・表記についての論は比較的すくない。啓蒙的に変遷を説いたものとして、山田俊雄氏「国語の文字の変遷」（国語教育の

ための国語講座、3、七月)・山内育男氏「表記法の変遷」(続日本文法講座、2、六月)があるが、山田氏のは、一つの文字観によって一貫した説明的態度をとっているのに対して、山内氏のは、项目的に平均化した記述的態度をとっている。個々の用字法・表記体について論じたものの中、万葉集に関するものとして、鶴久氏「万葉集における用字法的一面」(万葉、二十八号、七月)・筏敷氏「変字法より観たる万葉集の表記法の問題」(国語国文、二十七卷十一号、十一月)・蜂谷宣明氏「大伴家持の用字法—万葉集十九における助動詞の読添へ—」(山辺道、四号、三月)等がある。鶴氏のは、用字法の立場から万葉集の正訓を求めようとしたもので、秋往者紅丹穂経(二三・三二七)・天地依会限(六・一〇四七)・天雲乃退部乃限(九・一八〇一)等について、「往」は「去」との通用から「サレバ」と訓むべきこと、「限」は「極」との通用から「キハミ」と訓むべきことを論じている。明解な論述である。筏氏のは、主として変字法との関係において万葉集の表記法と年代との関係その他の問題について各方面から論じているが、問題を将来に残している。蜂谷氏のは、家持の用字法が巻十九において特に慎重であったことを述べ、助動詞の読添えについて、一般方式にあわないもの二例をあげて、従来の訓の訂正を要求している。次に、今昔物語に関するものに、山田俊雄氏「表記体・用字と文脈・用語との関係—今昔物語集宣命書きの中の特例に及ぶ覚え書—」(成城文芸、十五号、八月)・桜井光昭氏「今昔物語集の『御・坐・在』等の訓をめぐって」(学術研究八早稲田大学V七号、十一月)の二つがある。山田氏のは、統

紀宣命の大字の仮名の使用状況とかな文における漢字混入の状況について述べた後に、今昔物語集の天竺震旦の部における大字のかなの使用状況を論じて、それが多く擬音語・擬声語の類と時代語・俗語の類に用いられているとしているもの。桜井氏のは、今昔物語集において「いらっしやる」の意味に用いられた御・坐・在のよみかたについて、イマスガリ・オハス・オハシマス・イマス・マシマス等の訓の使い分けを考察したものの。その他に、鈴木真喜男氏「『地』のかな—定家自筆本における—」(国語研究八国学院大学国語研究会V八号、十一月)がある。定家自筆本及びこれに準ずる資料において、「地」が濁音がなとして用いられているという論である。

文法 総括的なものとして、「日本文法講座、4、解积文法」

(明治書院、二月)・「『解釈と鑑賞』特集、古典解积のための助動詞」(至文堂、四月)・「『国文学』特集臨時増刊、古典文法の第一総合探求(助動詞篇V)」(学燈社、十二月)等がある。「解积文法」については、すでに前年度の「展望」に馬淵和夫氏の紹介・批判があるので、ここではふれない。「解釈と鑑賞」には、岩淵悦太郎氏「助詞のはたらき」・土井忠生博士「格助詞」・松村明氏「副助詞」・白石大二氏「係助詞」・森重敏氏「終助詞」・塚原鉄雄氏「接統助詞」・佐伯梅友博士「間投助詞」等の論稿をおさめ、「国文学」には、岩淵悦太郎氏「助動詞をめぐって」・佐伯梅友博士「助動詞の規定と歴史的展開」・田辺正男氏「助動詞に関する諸学説と研究の現段階」・保坂弘司氏「解积文法における助動

詞の位相」等の論稿と助動詞各論についての諸家の論稿とをおさめて、他に、宮坂和江氏編「助動詞研究文献総覧」を加えている。古典文法の研究が盛況を示している現在のような段階においては、時にこうした概観的な論稿の編集が行なわれることは、次の研究の進展のために望ましいことと言える。

個々の研究においては、助動詞に関するものが目立って多い。

「の」「が」については、三宅清氏「古語における『の』主格の用法」(人文科学科紀要八東京大学教養学部十六輯・十一月)木之下正雄氏「題目提示の『の』について」(解釈、四巻六号、六月)・中川浩文氏「助動詞『の』『が』『つ』の原初的性格について」(女子大國文八京都女子大学十号、十月)・三吉陽氏「格助詞『の』の一用法」(愛媛國文研究、七号、三月)・寺田泰政氏「いわゆる同格的用法の『が』について」(國語研究八國学院大學國語研究会八号、十一月)等がある。三宅氏のは、助動詞「の」の用法として(一)主格につくもの(二)連体格につくもの(三)一種の嘆辞として用いるもの三種があること、「の」は本来は嘆辞であったこと、「の如く」の意と説かれる「の」は主格の「の」と見るべきだということ、主格の「の」は句中にのみ用いられるとするのは誤りであること、時枝誠記博士のいう指定の助動詞「の」に指定の意味はなく、すべて助動詞「の」として三種の用法のどれかに該当すること、「の」の終結に連体形を用いたものが多いのは、「の」がもと嘆辞であったためであることなどを論じたもの。処理の困難な「の」に対して一貫した解釈を与えたものである。木之下氏のは、題目提示の「の」が、誤って連体語に

解されたり、「に」と同じように連用法を表わすと説かれたりする場合のあることを指摘したものの。中川氏のは、三つの助動詞の成立当初の性格を推定して、「の」は音調的性格が強く、「が」は準体的な重さを持ち、「つ」は指示性の接尾語であったものとする。「の」については、三宅氏が「もとは嘆辞であった」とするのと共通するものがある。三吉氏のは、中古における「の」の一用法として、目的格をかねた提示格の用法を認めようとするもの。寺田氏のは、「の」と「が」についてのいわゆる同格的用法を確認しようとするものであるが、一方に青島徹氏「『童のをかしき』といふ語法」(平安文学研究、二十一号、六月)のように同格語説を訂正しようとするものも見える。「の」についての論議は、当分は続けられなければならないだろう。次いで、「を」に関するものに、小山敦子氏「頻度から見た目的格表示の『を』の機能と表現価値」(國語学、三十三輯、六月)・木之下正雄氏「間投助詞ヲについて」(鹿児島大学教育学部研究紀要、十巻、十二月)がある。小山氏のは、松尾拾氏・広井玲子氏等の所論をうけて、源氏物語を中心として、格助詞と見られている「を」を格助詞零の表現との比較において検討して、そこに一貫して見られるものは一種の主情的な強調であるとする。そうして、このような主情的な性格は間投詞「を」に由来するものであろうとする。丹念な調査にもとずいた論であるが、一方、木之下氏のは、サツマ方言と古代語の間投助詞「を」について考察して、この語の性格は、事柄について聞手に念を押す気持を鄭重な態度で述べるところにあるとし、間投助詞「を」と格助詞「を」とは本来異質的

なものだとしている。その他の助詞に関するものに、高松佐久江氏「助詞『し』の用法と機能」(女子大国文 \wedge 京都都女子大学 \vee 九号、六月)・小久保崇明氏「八代集よりみた係助詞『や』『か』の相違について」(解釈、四卷、十一・十二号、二月)・此島正年氏「接続助詞『て』と『して』」(国学院雑誌、五十九卷十・十一号、十一月)・藏中進氏「禁止表現における否定辞『な』について」(国語学、三十二輯、三月)・福島邦道氏「禁止『そ』について」(未定稿、五号、七月)・麻生耕三氏「時枝文法『と』の本質」(愛媛国文研究、七号、三月)等がある。ともに従来の研究の確かめから一步の進展を目ざそうとしている。高松氏のは、「し」の承接関係による機能を究明し、時代による変貌をとらえようとしたもの、此島氏のは、「て」と「して」について、連接関係の異同を考察して、特に「して」が、宣命から漢文訓読を経て、文語的にその特殊性を固定させてゆく過程を究明したもの、藏中氏のは、上代に見える(一)な―そ・そね・〇(二)―な(三)―な(四)―な(五)の禁止表現について、(一)(二)の「な」がともに形容詞「なし」の語根であったものとし、これら三種の禁止表現における否定辞は起源の本質において同一のものであったとする論である。

活用語に関するものには、時枝誠記博士「条件法として解釈される連体形の一用法」(国語と国文学、三十五卷、二号、二月)・福田良輔氏「古代日本語における接尾辞『り』について」(国語国文、二十七卷十一号、十一月)・関一雄氏「中古・中世のいわゆる複合動詞について—源氏・栄花・宇治拾遺・平家の四作品における—」(国語学、三十二輯、三月)・宮地幸一博士「動詞『満

つ・満たす』考」(国学院雑誌、五十九卷十・十一号、十一月)・土部弘氏「連体格用法の \wedge ず \vee は連体形なりや—源氏物語における \wedge ず \vee の接続」(国文学 \wedge 関西大学 \vee 二十一号、四月)・福永静哉氏「上代に於けるラ変及び上一段動詞連体形の終止同化について」(女子大国文 \wedge 京都都女子大学 \vee 九号、六月)などがある。時枝博士のは、源氏物語を資料として、連体形に条件法としての用法があることを示そうとしたもの。連体形をとる例の中には、体言相当格とも条件法とも見られるものと、条件法としてしか解けないものとがあるが、前者において体言相当格と見られるものは対象語である。この対象語格が条件法に移動することによって後者の用法を生じたものだとする。これに対しては、三宅清氏が批判を加えて、時枝博士が「条件法としてしか解けない」とする例は主語格と見て十分だとし、対象語格が条件法に移動する理論も確たる理由はないとしているが、同様の感を抱かざるを得ない。

(三宅氏「古語における『の』主格の用法」人文科学紀要、十六輯、十一月)福田氏のは、いわゆる完了の助動詞「り」が「あり」の融合によって生じたものとする従来の考えかたに對して、接尾辞乃至複語尾としての本来的な「り」が存在していたのではないかという論である。アルタイ祖語との比較等によって精密に構築された論ではあるが、なお、従前の成立説を否定する根拠は示されていない。関氏のは、複合動詞と見られるものを四作品から操作的に抽出することによって、その存在を肯定し、なお、他の複合語との比較によってその性格を論じたもの。宮地博士のは、みつ(自動詞四段)・みつる(自動詞上二段)・みつる(他動詞下

二段）・みたす（他動詞四段）の共存と漸移の相について考察したものの。土部氏のは、渥美功氏「打消の助動詞『ず』はそのままで連体形となりうるか」（古典ハ明治書院√三号）の批判から出発して、若干の連体格用法と見られるものは、連用形もしくは「語幹の用法」だとするもの。福永氏のは、連体形の終止同化がすでに上代からはじまっていて、そのあらわれがラ変及び上一段動詞に見られるという論である。この他に、福田良輔氏「古代日本語に現はれてゐる動詞型連用形の特異性について」（文学研究八九州大学√五十七号、三月）・春日和男氏「指定辞『たり』雑考」（同前）があるが、見ることができなかった。なお、宮田和一郎氏「語法と解釈」（国語国文、二十七卷十一号、十一月）の中に、助動詞「む」の意味用法について、佐伯梅友博士・大野晋氏の説に対する批判が見られるが、これは、同氏「助動詞『む』をめぐって」（解釈、四卷九・十号、十月）と重複している。

敬讓語に関するものに、土井忠生博士「源氏物語における「聞ゆ」の謙讓表現に関する一考察」（広島大学紀要、十四号、九月）小野祖教氏「大祓詞の「給ふ」とその主語―祝詞に於ける絶対敬語の給ふ―」（国学院雑誌、五十九卷十・十一号、十一月）がある。土井博士のは、まず、「聞く」という語が、「思ふ」との比較において、自己意識の低い語であることを規定し、次いで「聞く」が、「聞く」との比較において、客体中心の語であることを規定する。そうして、「言ふ」意の謙讓動詞「聞ゆ」は、「申す」が直接表現の語であるのに対して、間接表現の語であり、婉曲なひかえ目な表現であるとする。補助動詞としての「聞ゆ」は、

「奉る」が有形的・直接的・具象的・積極的であるのに対して、無形的・間接的・精神的・消極的であって、前接する動詞に相異が見られ、「思ひ聞ゆ」という形と「見奉る」という形とが量的に対応するという。なるほどと思わせられる。小野氏のは、大祓詞の「被給比清給事」の「給」を大中臣を主語とする第一人称的なものとし、「絶対敬語」と見るべきだという論である。その他に、宮田和一郎氏「中古語法覚書―敬讓語法と解釈―」（平安文学研究、二十二号、十一月）がある。橘誠氏「河内本源氏物語の語法―『給ふ』（下二段）の用語例の合理性―」（国学院雑誌、五十九卷十・十一号、十一月）は、河内本の校訂態度の合理性を、湖月抄本との比較において述べたもので、直接「給ふ」の用法にふれているものではない。

疑問表現に関するものに、阪倉篤義氏「上代の疑問表現から」（国語国文、二十七卷十一号、十一月）・木之下正雄氏「いつこの女かあるべき―反語文における疑問詞の連体法について―」（平安文学研究、二十一号、六月）がある。阪倉氏のは、疑問表現を（一）説明要求の疑問（二）判定要求の疑問（三）選択要求の疑問に分ける立場から古事記・万葉集における疑問表現と哉・耶・平等の助辞使用との関聯性を述べ、そこから進んで、判定要求は疑問表現中の特に問の表現であり、説明要求ないし選択要求はみずから疑い迷う疑の表現ではないか、などの問題を提起している。明確な論旨である。木之下氏のは、源氏物語には「疑問連体語―体言」の形をとるものが反語陳述に呼応する言い方があったものとする論。

文法に関するその他の論稿として、山口堯二氏「源氏物語にお

ける名詞構成の形式」(国語国文、二十七卷八号、八月)・原田芳起氏『「うち」の接続機能とその意味—中古特殊語法私考』(平安文学研究、二十二号、十一月)がある。山口氏のは、源氏物語における複合名詞について、どのような語が多く構成要素となるかということ、どのような複合形式が多く用いられたかということについての考察。原田氏のは、「うち」の接続助詞化の過程を説くとともに、「あひだに」「ほどに」との相異を論じ、『うち』の文型』について述べたもの。興味ある論考である。

なお、大野晋氏「上代特殊かなづかいと文法」(続日本文法講座(明治書院)Ⅱ、六月)は、入門的な解説書として意図されたものであるが、よくまとまったものになっている。

語彙・語彙

量的には最も豊富な分野であって、訓詁・注釈の類に及ぶと、「展望」をさえぎられる領域にまでひろがってゆく。視界にとどまる範囲で見られるほかはない。

まず、万葉集に関するものからながめて見るに、目につくのは井手至氏の活躍である。氏の論稿としては、(一)「憶良の用語『それ』と『また』」(万葉、二十六号、一月) (二)「万葉語『はた』の意味用法をめぐって—付「半手不忘」の解明」(万葉、二十七号、四月) (三)「語伏(ハ)まにまに√について」(国語国文、二十七卷九号、九月) (四)「副詞ホトホト(ニ)の意味構造」(万葉、二十九号、十月) (五)「古代の言語解明の二方法」(国語国文、二十七卷十一号、十一月)等がある。(一)は、憶良の歌に見える「其彼母毛」(三三七)・「姫部志又藤袴」(一五三八)の「其」と「又」につ

いて、当時の変体漢文中に、「其」は強調の助字として、「又」は併列の助字として用いられていたことに基いて使用されたものであろうとし、「其」は散文語に醸読した「それ」にあてたものであろうとするもの。(二)は、まず、副詞「はた」の原義は八片端で、片一方で√の意であったものとし、次いで、「半手不忘」(二三八三)の「半」について、この文字には八片端√の意があるので、この一字だけで「ハタ」と訓むべきだとするもの。(三)は、「神之諸伏」(七四三)の「諸伏」について、大陸の雑戯の一つである柶戯と関係づけて、これを(ハ)まにまに√と訓むべき根拠を示したもの。(四)は、上代における副詞ホトホト(ニ)の多義的な意味構造を統一的に把握しようとしたもの。(五)は、古代の言語の解明のために汎民俗伝承学的観点の必要であることを強調して、その一例として、「佐宿木花」(一八六七)の「宿木」を「クラ」と訓むことの根拠を示しているもの。どれもうなずけるものを持っている論である。他に万葉集に関するものとしては、小島憲之氏「万葉語—その口語性をめぐって—」(万葉、二十七号、四月)・土田知雄氏『「いちしろし」考』(国語研究(国学院大学国語研究会)Ⅷ号、十一月)・鈴木敬三氏「奈加弭考」(国学院雑誌、五十九卷十・十一号、十一月)等がある。小島氏のは、「去来(イザ)と「白水郎」の二語について、シナにおける典故を説き、その口語性を論じたもの。土田氏のは、「いちしろし」について、それをおこしている序詞または枕詞に含まれた譬喩媒材を手がかりとして、その意味をとらえようとしたもの。鈴木氏のは、「中弭」は矢筈をかける弦の中仕掛の部分と解すべきだとするもので

ある。

上代における万葉集以外のものに、三宅清氏「『衆聞宣』の意味について」(国語と国文学、三十五卷七号、七月)がある。これは、宣命における「衆聞宣」の「宣」を大命の主体である天皇に関するものとする時枝説を支持する立場に立って、これを否定する倉野説に反論を加えたもの。

中古の語意について論じたものの中では、田辺正男氏「『うつたへに』の修飾のしかたについて」(国学院雑誌、五十九卷十・十一号、十一月)が比較的丹念な論である。これは、「うつたへに」という語が、打消の助動詞にだけかかる用法を持ち、動作の行なわれ方が完全であることを述べる語だとして、源氏物語における諸家の解釈を訂正している。この他にも語意の論は相当に多いが、大部分は小論の程度である。田中重太郎氏「枕冊子語彙考証六条」(平安文学研究、二十一号、六月)は、「そぎすゑ」「ふくさのあか色」等についての考証。同氏「古語の多義性について」(平安文学研究、二十二号、十一月)は、「はえばえし」「枕」の二語をめぐっての論。石川広氏「枕冊子『ようたてのもり』私考」(平安文学研究、二十一号、六月)は、「ようたてのもり」を「夜立の杜」とする論。犬塚旦氏「『みさをにもてつけて考』」(平安文学研究、二十一号、六月)は、「人に顔など見られないようにし、態度・様子を品格あるさまに維持すること」がその意であるとするもの。原田芳起氏「『けしうはあらず』考」(解釈、四卷一号、一月)は、「けしう」を副詞と見ての意味の考察。浦部重雄氏「『聞こえてな』考」(解釈、四卷三号、三月)は、雄略紀

尾代の歌の「聞こえてな」の「聞こえ」を自動詞として説こうとするもの。犬塚旦氏「『愛敬』考」(解釈、四卷四号、四月)は、物語類の中に「愛敬」の意味をさぐるうとするもの。田中洋二氏「『見えす』考」(解釈、四卷四号、四月)は、更級日記中の標題の語についての考察。浦部重雄氏「『聞こえさす』の解」(解釈、四卷六号、六月)は、落窪物語中の一例で、「聞こえさす」の「さす」を使役と解かれるものについての考察である。その他、宮田和一郎氏「歌語のくさぐさ」(解釈、四卷二号、二月)・石川徹氏「平安文学語意考証」(平安文学研究、二十一号、六月)などがある。特殊なものに、山田実氏「与論島語と上代国語との比較研究」(国語学、三十四輯、九月)がある。奄美群島南端の与論島で語られる語の中の「あま・たかあまぬばる」等の語の意味から、上代語の解釈に示唆を与えようとするもの。

一般語彙に関するものに、築島裕氏「国語の語彙の変遷」(国語教育のための国語講座、4、四月)がある。和語・漢語・外来語・位相語等の項目に分けて、語彙の諸相を歴史的に通観したものである。その他、色葉字類抄の語彙について考察したものに、相坂一成氏「色葉字類の一語彙群」(国語学、三十三輯、六月)がある。

訓点語・訓点資料・その他 三十三年の国語学界の最も大きな成果は、中田祝夫博士の「古点本の国語学的研究 訳文篇」の刊行であろう。平安時代初・中・後期および院政期の訓点本を代表する地藏十輪経元慶七年点(八八三)・法華経文賛淳祐点(九五〇)

頃)・法華経義疏長保四年点(一〇〇二)・大唐西域記長寛元年点(一一六三)の四本を写真版としておさめ、訳文を対照させ、巻末に語彙・字音の索引をつけたものであるが、この資料は、今後多くの人々の手によって、国語史研究の上に生かされてゆくことであろう。この年は、他にも古点本の釈文を付した労作が出てゐる。大坪併治氏「小川本願經四分律古点」(訓点語と訓点資料別刊第一、一月)と築島裕氏「上野図書館蔵大慈恩寺三蔵法師伝巻第三古点」(人文科学科紀要、十六輯、十一月)である。大坪氏のは、本文をプリント版として掲げて、訳文を対照させるとともに、国語学的な解説研究を加えている。氏がこの方面の研究に積み重ねられた努力には敬意を表さなければならぬ。この書物には、春日和男氏の書評がある。(国語学、三十五輯、三十三年十二月)築島氏のは、本文の写真版を掲げ、訳文・索引をつけ、書誌・訓点についての解説を施したものである。なお、古点本について、全般的に紹介・解説を行なったものに、春日政治博士石山本最勝王經古点より(国語国文、二十七卷十一号、十一月)・大坪併治氏「再び法華義疏長保点について(上)」(島根大学論集、八輯、二月)・同氏「大東急記念文庫本百論天安点」(国語国文、二十七卷十一号、十一月)・築島裕氏「長承本蒙求字音点」(訓点語と訓点資料、十輯、十月)等がある。春日・大坪両氏のは、ラコト点・仮名・漢字・音韻・文法・語彙等の全体にわたって解説を施したものである。築島氏のは、今後統刊されるもので、第一稿は解題をつけて本文を掲げたものである。

訓点の個々の問題について述べたものに、大坪併治氏「『不肯』

の古訓について」(国語学、三十二輯、三月)・同氏「訓点語で『等』をゴトシと読む場合について」(訓点語と訓点資料、十輯、十月)・小林芳規氏「古点の況字統紹」(東洋大学紀要、十二集、二月)・吉田金彦氏「遊仙窟和訓の一特質」(国語国文、二十七卷二号、二月)・同氏「『跨』字の和訓をめぐって—その表記と音韻と意味」(訓点語と訓点資料、十輯、十月)・小松英雄氏「図書寮本類聚名義抄にみえる特殊な注音方式とその性格(上)」(訓点語と訓点資料、十輯、十月)等がある。その他、大坪併治氏「仮名とラコト点との交渉」(国語国文、二十七卷一号、一月)は、一般に、点本におけるラコト点の発生事情と仮名との関係による消長について述べたものである。小林芳規氏「東大寺図書館蔵法華義疏紙背訓注」(訓点語と訓点資料、十輯、十月)は、本文を抄出して訓注を転写したものである。

以上の項目別の分野からもれたものに、文章に関するもの、言語生活に関するもの、索引等の資料類などがある。文章に関するものには、佐藤喜代治氏「文章の変遷」(講座現代国語学、Ⅱ、七月)・江湖山恒明氏「文章の変遷」(続日本文法講座、3、文章編、七月)・宮坂和江氏「かな文の歴史と特色」(同)・山田巖氏「漢字かなまじり文の歴史と特色」(同)等がある。平明な筆致で、複雑な変遷の事実を通観的に記述してある。その他個別的なものに、藤井信男氏「古事記の文章と『その』『この』」(解釈、四卷一号、一月)・秋山浩子氏「上代文学における比喩表現」(国文(お茶の水女子大学)Ⅹ号、十二月)・築島裕氏「竹取物語文体小論」(解釈と鑑賞、二十三卷二号二月)・小沢正夫氏「紀貫之

の仮名文について」（和歌文学研究、五号、一月）・小林芳規氏
「土佐日記の文体」（王朝文学、創刊号、十一月）・原田芳起氏
「物語描写における地と対話」（解釈、四卷十一・十二号、十二月）
・宮坂和江氏「説話文学の文体」（国文学ノ学燈社√三卷十一号、十一月）等があり、参考文献として、西尾光雄氏「古典の文章研究書目並びに解題（上代）」（文学、二十六卷十二号、十二月）がある。

言語生活に関するものには、岩淵悦太郎氏「言語生活の変遷」（講座現代国語学、Ⅱ、七月）・松村明氏「言語生活の歴史」（国語教育のための国語講座、7、五月）がある。「言語生活」の記述がどうあるべきかということは、もちろん今後の問題であろう。

索引類としては、京都大学文学部国語国文学研究室「新撰字鏡国語索引」・広島大学文学部国語学研究室「古本説話集総索引一般語彙編」・高木市之助氏及び富山民蔵氏「古事記大成索引篇」・山田忠雄氏「竹取物語総索引」等があり、その他の資料として、田中章夫氏校訂「法隆寺藏法華修法一百座聞書抄」（「未定稿」別冊）・高羽五郎氏「スピリツアル修行、2」（国語学資料十六輯）等がある。

— 京都学芸大学教授 —